

説教 『信じる者はむしろ見えない』山本 護牧師
聖書 エレミヤ書 20：9／ルカ福音書 24：28～35

二人の弟子は、イエスの解放運動(ルカ 24:21)に挫折して帰郷する途上だった(24:13)。そんな彼らに「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた(24:15)」。何よりも、イエスが近づき、共に歩いて下さる。「しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった(24:16)。「遮られた目」とは何か。復活の報告は聞いていても(24:22~24)、十字架の死に押しつぶされ(24:20)、死に屈服している状態のこと。人間は弱い。圧倒的な力によって「目が遮られる」ことがしばしばある。

二人の弟子は、誰だか判別できないイエスに対し、同宿を強く求めた(24:29)。二人は無自覚だが何かを予感したのではないのか。それは後にはっきり自覚される(24:32)。聖書の解き明かしを受けたことはもちろん(24:27)、「道で話しておられるとき(24:32)」にも、重低音の振動で心にさざ波が立っていた。こうした些細な予感は、大きな失意や挫折に比べて、ただの「気のせい」にされやすい。

夕食の席で「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(24:30~31)」。目が開き、分かる。が、見えなくなる。ううむ不可解。最後の晩餐ではパンを裂いて使徒に与え、「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である(22:19)」と語っていた。二人の弟子は、イエスの体である裂かれた「パン」を受け取ることで、「復活した体」に出会えたのか。分かち与えられた恵みによって「二人の目は開かれ」、それゆえに「イエスだと分かった」。ところが、イエスの姿は「見えなくなった」。これはどういうことであろうか。「目が開かれた」のに、なぜ「見えなくなる」のか。直感では柔らかく掴めるのだが、論理的に考えると袋小路。立ち止まり、来た道をふり返り、改めて御言葉を噛みしめよう。

しょんぼり帰郷する二人の弟子にイエスは近づき、「一緒に歩き始められた(24:15)。「道で話しておられるとき(24:32)」弟子の心にさざ波が立ち、聖書を教えられて(24:27)「心は燃えていた(24:32)」。彼らは失意に沈められたままではない。気づかぬうちに「パン」を受け取る準備ができていたのだ。通常は、招く側の者がパンを裂いて分かつのだが、近づいて共に歩き始めた時と同じように、客人のイエスの方が率先して二人にパンを与える(24:30)。「すると、二人の目が開けた(24:31)」。そして、目の前にいる不可思議な人が「死をも超えるキリスト」であると、己が胸に深く納めた(24:31)。

復活を信じる者は、もはや「見えるイエス」を必要としない。だが使徒トマスは、見えるイエスにこだわった(ヨハネ 20:25)。未熟なトマスに、イエスは「しょうがないなあ、しっかりせいや」という調子で、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである(20:29)」と戒めた。

二人の弟子はイエスが見えなくなったことで、いっそう自覚的・独立的になり(ルカ 24:32)、呪わしい十字架の場へ舞い戻った(24:33)。弟子たちは今や、復活のキリストを証しせずにはいられない。霧散した者たちが再び集められ、神の言葉を「預る」預言者のようになろうとしていた(24:33~35)。「主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がる(エレミヤ 20:9)」ごとくに。



《おまけのひとこと》

見えるイエス 見えないキリスト どこまでが他者で どこからが自己なのか それらは霊において一つの御手にある(ロマ 8:16) 同じうねりでありながら 人はそれを混沌と言い また創造と言う